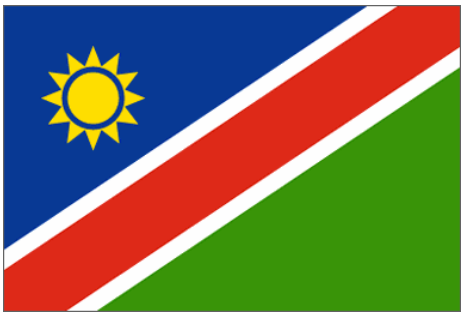
ナミビア共和国

【国名】

●世界最古の砂漠の一つといわれるナミブ砂漠に由来します。「ナミブ」とは、先住民の言葉で「なにもない」との意味であり、1968 年国際連合が南西アフリカの独立支援のため与えた国名です。90 年に独立し、独立の日は国連の「国連反アパルトヘイト（人種隔離）デー」にちなんで３月 21 日としました。

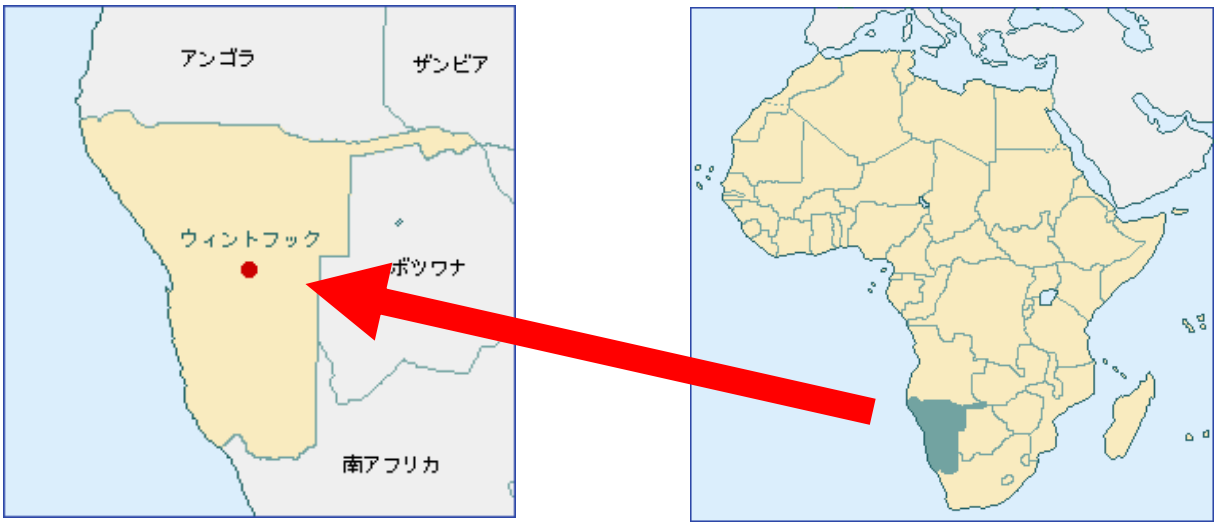
【国旗】

●太陽は生命とエネルギーを象徴し、その黄金色は平原とナミブ砂漠を表しています。左肩の青色はナミビアの空と大西洋とその恵みを、赤い帯はナミビア人独立の闘争で流された血と犠牲を、右下の緑は植物と農業資源を意味します。そして赤の帯を縁取りする白は平和と統一の象徴です。独立時、国旗のデザインが公募され、835 の案の中から採用されました。



【国土】

●南半球に位置しているナミビアは、全体的には亜熱帯気候に属しており、面積は約82.4万㎢（日本の約2.2倍）です。首都のウィントフックの位置する中央部は、標高1650ｍの高原のため比較的しのぎやすく、雨期（11月頃～４月頃）と乾期（５月頃～10月頃）に分かれていますが、一般的に乾燥した気候となっています。昼夜の気温差が大きく（乾期の夜間には０～10度となることも多い）、朝晩は上着が必要となります。人口は約253.3万人で人口密度は３人／㎢と世界で最も人口密度が低い国のひとつです。



●ナミビア北東部の、東に細長く突出した領土はカプリビ回廊と呼ばれます。同回廊は、ナミビア（当時は南西アフリカ）を領有していたドイツ帝国が、回廊を流れるザンベジ川を獲得して、同様にドイツの植民地であったタンガニーカ（タンザニアの大陸部）が面するインド洋への大陸横断路を確保するため、1890 年に英国と領土交換を行って南西アフリカに編入した土地で、当時のドイツ宰相レオ・フォン・カプリビにちなんで名付けられました。しかし、領土交渉後に、ザンベジ川は中流にヴィクトリアの滝があるためにインド洋までの通航が不可能であることが判明しました。

【ナミビアの世界遺産】

●ナミビアには、ナミブ砂漠とトゥウェイフルフォンテーンという２つの世界遺産があります。

●大西洋岸にあり、世界最古の砂漠のひとつと言われているナミブ砂漠は、2013 年、世界自然遺産に登録されました。23,000 ㎢の

広さを誇るナミブ・ナウクルフト国立公園は、砂丘を保護するために作られたナミビア最大の自然保護区であり、世界第４位の規模を誇っています。

●広大なナミブ砂漠の中でも最奥部のソーサスフレイは、アプリコット色の赤い砂が有名であり、高さ 300mの世界最大の砂丘群を抱えています。特に、公園入口から45kmのところにある「デューン(DUNE)45」は、美しい写真が撮れる場所として有名です。

●2012 年 12 月、紅白歌合戦において、特別出演歌手の MISIA（第５回アフリカ開発会議(TICADⅤ)、2019 年の TICAD７名誉大使）が、ナミブ砂漠から中継で登場し熱唱しました。

ナミブ砂漠

デューン 45

●北西部にあり、2,000 年以上前のものとされる岩刻画群から成るトゥウェイフルフォンテーンは、2007 年に世界文化遺産に登録されました。岩刻画はこれまで 2,000 以上が発見されており、狩猟の様子や動物などが描写されています。

動物を描いた岩刻画

【砂漠の植物】

●ウェルウィッチア（学名：Welwitschia mirabilis、和名「奇想天外」）は、葉の基部に成長点があり伸び続け、先端部から枯れていきます。根は 10m以上伸び地下水を汲み上げ、葉から水分を蒸発させ冷却することで砂漠の暑さに耐えて 1000 年以上生きると言われています。ナミブ砂漠でしか見られない絶滅危惧種。生存・不屈の精神をあらわすとして、ナミビア国の国章にも描かれています。

【フィッシュ・リバーキャニオン】

●ナミビアの南部に位置し、アメリカのグランド・キャニオンに次いで世界第２の規模を誇る大渓谷です。最大幅は 27km、深さは 550m、距離は 160km に及びます。

【エトーシャ国立公園】

●アフリカ最大級の塩湖であるエトーシャ塩湖（千葉県や愛知県とほぼ同じ面積で、塩度は海水の２倍）を囲んだ国立公園です。雨期にはアンゴラ国境付近から雨水が流れ込み、象やライオンなど大型野生動物が多く集まるアフリカ屈指の野生の王国です。

エトーシャ国立公園の野生動物

【ウォルビスベイ】

●ナミビア最大の港であり、入り江にはフラミンゴを含む多数の鳥類が訪れることで有名です。1990 年の独立後も引き続き南アが占領していましたが、ナミビア政府の再三に亘る返還要求後、1994 年にナミビアに返還されました。現在ナミビア政府が国家開発計画で進めている南部アフリカ開発共同体（SADC）における国際物流ハブ化構想において、物資のゲートウェイとなる最重要拠点となっています。

ウォルビスベイ港の様子

【ケープ・クロス】

●ナミビアの中都市、スワコップムントの115km北に位置するオットセイの生息地です。何万頭もが海岸で密集したり、波間に漂う姿は壮観です。ヨーロッパ人が初めてナミビアの海岸に到着し、石の十字架をたてたことが地名の由来となっています。

無数に集まるオットセイ

【リューデリッツ】

●大西洋沿岸の港町で、ダイヤモンド産出に関わり栄枯盛衰したドイツ人入植地の廃墟（ゴーストタウン）が観光名所となっています。また、町の南部地域は、ダイヤモンド採掘のため、一般人は立ち入り禁止地区となっています。

廃墟の様子

【スポーツ】

●人気のあるスポーツはサッカー、ラグビー、クリケットです。特にサッカーは一番人気があり、ガインゴブ大統領もワールドカッ

プ観戦に行くほどの人気ぶりです。なお、ラグビー・ワールドカップ 2019 日本大会にはナミビア代表チームが出場しました。チームの愛称は、Welwitschias(ウェルウィッチアーズ) であり、ナミブ砂漠植物に由来しています。

●2021 年に開催された東京オリンピック・パラリンピック 2020 には、ナミビアから計 14 名の選手が出場しました。オリンピックでは女子 200 メートルでクリスティン・ムボマ選手が銀メダルを、パラリンピックでは男子 400 メートルでアナニアス・シコンゴ選手が銀メダル、ジョハネス・ナンバラ選手が銅メダルを獲得しました。

【ヒンバ族】

●北部オプウォという町の周辺で暮らす遊牧民です。日差しや虫から肌を守るために、バターと赤い粘土を混ぜた「アラミ」とい

うものを髪や体に塗っており、全身赤茶色になっています。衣服は、腰から牛革でできた前垂れのみを着けており、上半身は裸で生活しています。

【食事】

●かつてドイツの植民地だったこともあり、ソーセージ類が充実しています。主食はトウモロコシやヒエの粉をゆでて調理したパップです。独系ビール（Windhoek Lagerなど）も美味しいです。また、野生動物も多く生息していることからシマウマやオリックスなどのゲームミートも楽しむことができ、大西洋に面し豊富な漁場を有し

ているため生牡蠣などの新鮮な海鮮も堪能できます。

パップ（右側）

カパナ（ナミビアのストリートフードの一つ）

【漁業】

● ナミビアの沿岸は良い漁場となっており、日本との関係ではお正月の「おせち料理」や祝い膳に欠かせない伊勢エビは日本に多く輸入されてます。

【鉱物資源】

- ナミビアは、ダイヤモンド、銅、金、亜鉛、ウランなどの鉱物資源に恵まれ、鉱業が漁業や農業と並ぶ主要産業となっています。
- ナミビアはダイヤモンドの産地として有名ですが、その 95%が海から採掘されています。それは、南アフリカ内陸部高地のキンバーライトと呼ばれるダイヤモンド鉱床が風化作用を受け、固いダイヤモンドが数千万年にわたって、川により大西洋に運ばれ、その後、海流によって海岸沿いに北部に移動し、ナミビアの浅い海底に堆積されたためです。長い年月を経て沿岸地域で発見されるダイヤモンドは、美しく輝く宝石として世界中の人々を魅了しています。
- ナミビアは、原子力発電で重要な役割を果たすウランの生産国としても知られています。生産量では、カザフスタン、ウズベキスタンに次いでナミビアは世界第３位の産出国となっています。

【対ナミビア経済協力】

● 日本は、1990 年のナミビアの独立以来、230 億円規模の経済協力を実施。具体的には、持続的かつ包摂的な経済・社会発展の実現に向けた支援のため、産業基盤強化、農業開発による貧困削減・生計向上を主要な柱として様々な支援を行ってきました。天然の良港（ウォルビスベイ港）や、周辺諸国へ通じる国際回廊を有する好立地を生かした物流立国への支援や、小規模農業従事者である低所得層が多く居住する北部地域における農業開発支援は、ナミビア政府や農業従事者から高く評価され、感謝されてきました。また、持続的成長に不可欠な人材育成のため、様々な分野において各種研修等の技術協力も実施しています。

● ナミビアの将来を担う人材を育成することは重要な経済協力のひとつです。高等教育における最近の取組として、JICA から、就業率向上のための産業人材育成アドバイ

ザーをナミビア科学技術大学へ派遣しています。小型トラック模型の組立て演習を通じて計画実施やカイゼン、想像力、チームワークなど組織の中で職務遂行に必要な就業スキルの習得を目指すというユニークな取組がナミビア政府からも注目されています。

● 効果的な人材育成のためには、初等教育から取り組みを始めることが重要です。JICAは2006年以来、累計で150名以上の海外協力隊員を教育分野を中心に派遣してきました。ナミビアでは教室不足も深刻であるため（約4,500教室が不足）、日本は1997年以来、これまでに60校以上の小中学校において新規教室等の建設を実施してきました。

両国国旗が描かれた新校舎